
魔法先生ネギま！ 刹那の兄、その名は那由多！！

雑魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 刹那の兄、その名は那由多！！

【Nコード】

N2323S

【作者名】

雑魚

【あらすじ】

もし刹那に兄がいたら、もしその兄が物凄く強かったら、もし麻帆良に来たら、物語はどのように変化するのか？そんなIfストーリーです。

登場人物紹介（前書き）

更新は不定期ですが、どうかよろしくお願いします。

登場人物紹介

登場人物

名前

桜咲 サクラザキ 那由多 ナユタ ジルシュヴェッサー

年齢

17歳（刹那達は中学3年）

性別

男

備考

髪は黒色で腰まである髪を後ろで束ねている。

3歳の頃とある理由により『ナンバーズ』（『ナンバーズ』については下を見て下さい）の元『13番』に拾われる。

その後青山家に預けられ神鳴流を習う。

7歳の頃元『13番』の槍さばきを見て憧れ槍を教えてもらうために、刹那と別れなければならないときに、刹那の願いにより義兄妹になる。

それからは『ナンバーズ』の元『13番』の薦めにより被戈（ジル）という名の槍を使う被名民（ジルシェ）という部族で腕を磨く。

その後14歳で最年少被戈の到極者（ジルシュヴェッサー）になる。（被戈、被名民、被戈の到極者についても下を見て下さい）

さらにその1年後の15歳で『ナンバーズ』の『13番』となる。
『ナンバーズ』を誇りに思っているが、番号で呼ばれるのは嫌い。
（他人を番号で呼ぶのは別にいいらしい）
重度のシスコン。ただしつねに刹那の味方ではなく、時には敵にもなる。

基本的に丁寧な口調だがキレると口が悪くなる

『ナンバーズ』

魔法世界・旧世界を問わずに武の道で最強と呼ばれているものが入っている。

ただし、拒否する者や個人の事情によりやめる者もいるため『ナンバーズ』は最強ではない。

人数自体はたった13人だがこの13人で魔法世界の全人口の5分の4を殺すことができると言われている。

しかし、知名度は異常に低い、（『ナンバーズ』全員が自分に利益のある仕事か興味のある仕事しかないため）

『ナンバーズ』の者はほとんどが自由に過ごしている。

『ナンバーズ』の者は自分の番号の書かれた『カード』という物をもっている。

名前

レイ クレセント

年齢

32歳

性別
男

備考

金髪碧眼で『ナンバーズ』の『1番』。

『ナンバーズ』のリーダーしかし、そういう仕事はアリスに任せて基本的にはサボっているダメリーダー。

しかし、実力は『ナンバーズ』1で大国ですら1人で壊滅できる。かなりのイケメンのため20代に見られる。

名前

アリス フォーデル

年齢

32歳

性別

女

備考

『ナンバーズ』の『2番』。

髪はライトグリーンで腰まである。

眼鏡をつけていたりその性格から『ナンバーズ』の一部からは委員長と呼ばれている。（ただし本人はこの呼び方が嫌いなため呼んだ相手を毎回ボコボコにしている）

レイが仕事をサボるため『ナンバーズ』での仕事は主に彼女がして

いる。

かなりの美女のためレイ同様20代に見られる。

名前
アオヤマ
青山
オリヅル
織鶴

年齢

45歳

性別

女

備考

『ナンバーズ』の『5番』

髪は黒で膝の所まである。

実年齢45歳なのに見た目は高校生と言っても違和感がないほどの容姿。

詠春の姉なのに性格が全く違う。

那由多のことを気に入っている、そのため個人的に那由多に依頼を頼むことが多い（多いと言っても年に数回程度）

ただし、この依頼がすべて危険な依頼であるはずなのに実際とは違う依頼にして那由多に伝えている。

例えば、妖怪退治と依頼して、その妖怪が九尾の狐であったなど

名前

??

備考

『ナンバース』の元『13番』で那由多がジルシュヴェッサーになると同時に『ナンバース』を辞めて行方不明となる。

その他

被戈（ジル）

特殊な金属で作られているためよっぱどのがない限り壊れることはない。

被名民（ジルシエ）

被戈を使って戦う部族の名称。

基本的に生まれた時から専用の被戈を与えられ物心ついた時から被戈を朝から晩まで振るう。

そのため一人一人の実力が高い。

ただ人数自体が少ないため、知名度はあまり高くない。

被戈の到極者（ジルシュヴェッサー）

被名民の中でも力のある者が名乗ることを許される、この者達は名前の最後にジルシュヴェッサーとつける。

被名民の中でも30代でなれば天才、20代ならば神童と言われる。

そのため、14歳しかもたつた7年間でジルシュヴェッサーとなつた那由多は被名民史上最高の才能を持つと言われている。

被名民同様に数が少ないため存在を知っている者もほとんどいない。

登場人物紹介（後書き）

抜戈などは、黄昏色の詠使いの設定です。

読んでみてください。

誤字、脱字がありましたらお知らせください。

感想もドンドン下さい。

ブローグ

「ひぐつ、やだよ、那由兄どつが、いつちゃだよ」

「刹那だから何度も言っけど一生離れるわけじゃないし電話で話してもできるから大丈夫だよ」

「なら一つしてほしことがあるの……………」

「なんだい？」

「その……………兄妹になつてほしいの」

僕はゆっくりベッドから起き上った。

……………久しぶりに見たな。そうか、あれから10年刹那ももう13、4歳か。

そろそろ会いたいな、でもな……。会えないよなあ…。

はあ、うだうだ考えても、しかたない体でも動かしに行こう。

真っ白な部屋で青年は一人槍を振るっていた。

それは鍛錬というより舞のようにもとれるようなものである。

「いつ見てもきれいだな、お前の槍さばきは、なあ那由多いや……
『13番』」

と那由多と呼ばれた青年の後ろから袴を着た服装とは合わない金髪の青年より年上の男がニヤニヤしながら声をかけた。

「……それはどうも『1番』さんそれと番号で呼ばないでください」

那由多は呼び方が気に入らなかったようで不機嫌そうにそう返した。

「わかったよ。それと委員長が呼んでたぞ」

「委員長って言ったらまた怒られますよレイさん」

わかってるよ。そう言ってレイと呼ばれた男は部屋を出た。それに続いて那由多は部屋を出た。

「那由多連れて来たぞ」

レイは執務室と呼ばれる部屋に入っていく。それに続くように那由多も入っていく。

「おはようございます。アリスさん。」

那由多はレイと同じくらいの年齢のライトグリーンの髪をしたアリスと呼んだ女性に話かける。

「おはよう。急に呼び出してごめんね、那由多くん。あなたに依頼よ。」

「僕にだけですか？『ナンバーズ』じゃなくて？」

那由多がそう思うのも不思議ではない。本来、依頼とはまず『ナンバーズ』にされたあと、アリスによって『ナンバーズ』の全員に依頼の概要が伝えられ受ける者に詳しい資料が渡されるため、依頼者が『ナンバーズ』個人を指定することは珍しいのである。

「ああ、『5番』おっと、織鶴のやつがお前にだとよ。」

那由多の問いに答えたのはアリスではなくニヤニヤとしたレイだった。

「……あの人からですか、あのひとの依頼は基本僕を不幸にするんですか」

那由多は最悪の名前を聞いたとばかりに嫌な顔をする。それも無理はない織鶴と呼ばれた女性からの那由多への個人的な依頼はそのほとんどが危険なものばかりである。

「そう言わずに受けてあげて那由多くん」

苦笑しながらアリスは言った。

「はあ、わかりました。で、内容は何ですか？」

「……それが『私のところに来い、安心しろ今回ののはお前に、とってもいいことだぞ』って手紙に書かれているわ」

「……わかりました。行ってきます。確か場所は日本の関西呪術協会の総本山でしたよね。」

「ええそうよ、いつてらっしゃい」

「気をつけるよ、那由多」

アリス、レイ両方が那由多を送り出す。

「はい、行ってきます」

やってきました、関西呪術協会。相変わらず大きいですね。

僕がそう思っていると前の階段からここ関西呪術協会の長の詠春さんが来ました。

「久しぶりですね、那由多くん」

「お久しぶりです、詠春さん。というかずいぶん老けこみましたね」

そう僕が言くと詠春さんは、はははと苦笑まじりに笑います。

というより、どうやったら10年でここまでふけるのだろうか？

「それより、奥で織鶴ねえさんが待っていますよ」

「……あの人は長をなんだと思っているんですか」

パシリじゃないんですから。

「それより、急いだほうがいいですよ。遅いと言って怒っていましたから」

ツ！？まずい、あの人キレたら何をしでかすか分からん！

「わかりました。詠春さんありがとうございました」

やばい！そう思いながら僕は階段を駆け上がる。

現在僕は織鶴の待つ部屋の前にいます。何故か部屋から怒気が漏れています……………正直入りたくないです。

「失礼します、織づ」「遅い！」「」

……………遅いってまだ依頼があって2日しか経ってないんですけど。ここで言い訳しても殴られそうですね。はあ。

「……………すいません」

「2日もまたせるなんて……………」

早い方だと思っんですけど。

「まったく！それで依頼なんだけど……………」

「織鶴ねえさん、それは私から話しますよ」

あとから入ってきた詠春さんが話し始める。

「那由多くん、君には麻帆良学園に行ってもらいます」

……麻帆良？どっかで聞いたような……………あ！！！

「麻帆良学園って刹那が行つてるところですか？」

「その通りですよ。君にはそこで警備の仕事をしてほしいんだよ」

確かあそこには物凄く貴重な魔法書がたくさんあつて侵入者が後を絶たないって刹那が手紙に書いていたからその警備だろう。

「わかりました。その依頼お受けいたします」

それに刹那にも会えるし。

「ほら、私の言った通りあなたにとっていいことでしょう」

「はいはい、ありがとうございます」

「なによ、文句あるの！」

……………どうせ自分にこの依頼が来て面倒だから僕に押し付けたに決まっている。まあ言わないけど。っていうか言ったら間違いなく殴られる。

「いいえ、文句なんて何もないです」

「……………まあいいわ、とにかく言つてきなさい」

「すまないね、那由多くん。あと木乃香のこと頼んでいいかい？」

そういえば詠春さんの娘さんも麻帆良に行っていたんですね。

「わかりました、木乃香ちゃんはまかせて下さい」

「着いたらまずは学園長に会って下さいね。」

「わかりました。」

待っててね刹那！今から会いに行くよ！！

プロローグ（後書き）

誤字、脱字がありましたら、お知らせください。

感想もドンドン下さい。

第1話

「…………迷った」

何処なんですか、ここは？だいたい広すぎなんですよ！？

それにしても困りました。詠春さんの言った通り学園長に会わないといけないのに学園長の居場所がわかりません！？というか今居る場所さえ何処かわかりません！？本当にどうしよう……………

「あのーどうかしましたか？」

振り向くとそこには黒髪をポニーテールにした女の子がいた。

「えつと迷ってしまいました……………」

「なるほど、だから道端でブツブツ言っていたんですね」

……………僕はそんなことしていたのか。鬱になりそうだ。精神的ダメージで……………

「何処に行きたいんですか？」

「……………え」

今なんと！？こ、これはまさか！？

ガシィ！！

「ッ！？な、なな／／／」

「連れて行ってくれるんですか！ありがとうございます！」

「あ、ああ／／だからその……手を離してくれないかな／／」

……あ！？さっき嬉しさのあまり手をにぎってしまった。

「ごめんね、つい嬉しくて」

「いや、いいんだ、それよりえっと………」

「あ！？僕の名前は那由多、桜咲 那由多だよ」

「私の名前は大河内 アキラだ、よろしく。でさっきの質問なんですが、那由多さんは何処に行きたいんだい？」

「学園長に会いたいんだ、いいかい？」

「それなら、ここから近いから行こうか」

「ここだよ」

あれから、10分くらいアキラさんと話しながら歩いていると着きました

というか何で学園長室が女子中等部にあるんだ。木乃香さんのためだよな。間違ってもロリコンとかじゃないよな。

「ありがとう、アキラさん」

「いや、いいんだよ那由多さん」

ノックをして部屋に入る

「失礼します、西から来た者です」

「よく来てくれたのう、ワシ麻帆良学園園長にして関東魔法協会会長
の近衛 近右衛門じゃ」

「麻帆良の魔法教師のタカミチ T 高畑です。」

「『ナンバーズ』13番桜咲 那由多 ジルシュヴェッサーです」

「『なつ！？』『ナンバーズ』しかもジルシュヴェッサーじゃと（だつて）！？」

『ナンバーズ』だけじゃなくジルシュヴェッサーまで知っていると
はさすがは関東魔法協会会長と英雄の仲間ですね。

「なんなら『カード』でも見せましょうか？」

「いや、大丈夫じゃ」

「……………そうですか、それで依頼なんですけど、警備でいいんですよね」

「それなんじゃが、3-Aの副担任をしてみんか？」

……………面倒だな〜断るか。

「僕は17歳で教職免許持っていませんよ」

「ネギくんも持っておらんし、10歳じゃぞ。そうそう、3-Aには木乃香もおるぞ」

木乃香ちゃんを守るなら近い方がいいけど……………

「ところで、那由多くんは刹那くんの関係者なのか？」

「一応義兄妹ですけど、なぜですか？」

「いや、刹那くんも3-Aにおり、その依頼受けましょう!」
「そうか」

刹那がいるから受けたんじゃないんだからね!?

「では、春休みが終わる2日後に頼むぞい、それと警備は今夜からしてほしから10時に世界樹……………あの一番大きい木の前にきてくれるかの？」

「わかりました。あと僕はどこに住んだらいいんでしょうか？」

「それなんじゃが女子寮の管理人室を使ってくれんかの？」

「それはつまり、女子寮の管理人もしろと？」

「そうなるの」

注文（依頼）の多いじいさんだな……

「わかりました。ところで刹那はどこにいますか？」

「たぶん、裏の森で葛葉さんと稽古しとるはずじゃよ」

「そうですか。ありがとうございます」

近右衛門 Side

「学園長令、彼が言ったことは本当なんですか！？」

タカミチくんが先ほどの那由多くんについて聞いてきた。

「おそらく本当じゃろう、『ナンバーズ』やジルシュヴェッサーについて知っているのが何よりの証拠じゃ」

それに、『カード』についても知つたしの。

「あの若さで『ナンバーズ』とはすごいというより……すさまじいですね」

「まあ大丈夫だろう、しかし嬪殿もえらい者を送ってきたの……」

これから、どうしたもんかの……

近右衛門 Side End

ここが裏の森だよな……刹那何処だろう？

ん？これは、人払いの結界じゃないか。この中かな？

「失礼します」

あいさつしたし、入ってもいいよね。

「誰だ!!」

ん？あれが葛葉先生って人かな？あの長刀からして神鳴流かな？

「こんにちは。西から新しく来た桜咲　那由多です、こちらに妹がいると聞いて来たんですけど……」

「こ、これは失礼しました。葛葉　刀子と申します。妹さんとは刹那のことですか？刹那でしたら今私の式神と戦っていますよ。たぶん、もうそろそろで終わりますよ」

「刀子さん終わりました、そちらの方はって那由兄!？」

「刹那、久しぶりだね」

「な、なんで那由兄がいるの？仕事があるから本部から離れられないから手紙でしかやり取りできないって??」

「僕にここの警備をしてほしいって関西呪術協会から依頼が来たからここで働くことになったんだよ」

「それじゃあ、いつでも会えるの!？」

「ああ、女子寮の管理人もしないといけないから管理人室にいるよ、というか今から部屋の用意をしに行かないといけないんだ」

刹那のクラスの副担任になるのは当日に知らせて驚かせよう

「なら、私もついて行っていいですか？」

「僕はいいけど、葛葉先生いいですか？」

「ええ、今日の修行も終わっているし、久しぶりの兄妹の再開をじやましちや悪いですから」

「そうですか、じゃあ行こうか刹那」

「はい、那由兄!」

第1話（後書き）

私はアキラが大好きです。

誤字、脱字お知らせください。

感想もドンドン下さい。

第2話

あれから刹那と最近のことについて話していると学園長の言っていた10時になったので、刹那と共に世界樹に向かうと何人も人がいました。

「よくきてくれたの、那由多くん」

「いえ、依頼ですから別にいいんですが……こちらの方々は一体どうしたんですか？」

「それがの……君の力がどの程度のものか見たいといつての……」

なるほど『ナンバーズ』を知ってる人なんてそうはいないから、伝えてないのか、はあ。

「わかりました。どうせ手合わせしろとかですよね、で誰と戦えばいいんですか？」

「う、うむ戦うのはあそこにおけるタカミチくんじゃ」

あれ？あのひと僕が『ナンバーズ』なのを知っていたんじゃないか？たのか？まあいいか……

「じゃあ始めましょうか」

「ああ、すまないね『ナンバーズ』のことを知らない者が多くてね。こうでもしないと君を認めてくれないんだ」

確かに僕みたいなの若造が急に警備にきたなんて言ってもたいていの人は務まるとは思わないか。まあ英雄の仲間と戦えるんだからいいか。

「『悠久の風』所属の魔法教師タカミチ　Ｔ　高畑いくよ!!」

タカミチはポケットに手を入れ戦闘準備にはいる。

さすがは英雄の仲間雰囲気全然違う、と思いつながら那由多は自身の武器である被戈を手に構える。

「『ナンバーズ』　１３番桜咲　那由多　ジルシュヴェッサー参ります!!」

刹那Side

「『ナンバーズ』　１３番桜咲　那由多　ジルシュヴェッサー参ります!!」

「ッ！？『ナンバーズ』だと！？本当なのか、刹那！？」

那由兄が言った瞬間隣にいたパートナーの龍宮 マナが叫んだ。

「あ、ああ手紙にも何度か『ナンバーズ』について書いた手紙があったぞ」

「あ、あの人が『ナンバーズ』の1人なのか……………」

「なあ龍宮その『ナンバーズ』とは何なんだ？」

「知らないのか！？刹那、確か神鳴流にも1人いるという噂を聞いたことがあるぞ！？」

「織鶴さんか？確かあの人『ナンバーズ』の5番って言うていたが、『ナンバーズ』がどういうものなのかまでは知らないんだ」

「……………5番か『ナンバーズ』とはな武の道で最強と呼ばれている13人の集まりだ、13人がその気になれば世界人口の5分の4を殺すことができると言われる集団だ……………」

「なっ！？本当なのか！？」

「ああ、その内の1人があそこにいるお前の兄貴だ。正直見ても意味がないと思っていたが、これは……………」

那由兄がそんなにすごいなんて……………」

刹那 Side End

なんか名乗った瞬間さわがれたんだけど。ていうか『ナンバーズ』知ってる人いるじゃん。

「どうしたんだい？よそ見なんてずいぶん余裕だね」

その瞬間タカミチは音速の拳……………居合い拳を放つ。その拳を那由多は見もせずにかわす。

「ッ！？さすがは『ナンバーズ』僕の居合い拳を見もせずにかわすとわね」

「ん？そうですか？『ナンバーズ』ならみんなこのくらいできますよ」

そう言った後那由多はタカミチは走り出すタカミチもそれに応戦するように居合い拳を放つ。

那由多は居合い拳をすべてかわしてタカミチとの距離をつめる。

しかし、タカミチは瞬動を使って那由多といっきに距離をとる。

「ここまで簡単によけると自信をなくしそうだよ那由多くん」

「いえいえ、一口に居合い拳といっても三流のは威力も速さもカス同然ですが、あなたの居合い拳はどちらも一流のもですよ」

実際よけるのもそういつまでも続きはしないだろうし。

「ははは、そりゃあどうもそろそろ僕も本気でいかせてもらおうよ」

すると、タカミチは左手に魔力を右手に気をためた。

「合成！」

まばゆい光がタカミチを包む。

「咸卦法か合成の割合も完璧なんてさすがは英雄ですね」

「『ナンバーズ』に褒められるなんて光栄だよ」

「いくよ！豪殺居合い拳！！はあああああああ！！」

すごい！！居合い拳？咸卦法でこんな技になるなんて！？

「なら僕も全力であたりましょう！！はあああああああ！！！！」

那由多も全力で袈裟をくり出す。

豪殺居合い拳と袈裟がぶつかりあう、まるで爆発があったかのような音と煙ははれそこには那由多、タカミチ両者共に立っていた。

「『ナンバーズ』以外でこんなに楽しい戦いは久しぶりです」

「僕も全力の豪殺居合い拳を放って相手がピンピンしているのは久しぶりだよ」

「なら第二ラウンドといきま」学園長、大変です!？」……………無理のようですね」

せつかく盛り上がってきたのに……………こりゃあ侵入者には覚悟してもらわないと。

「すまんのう、那由多くんタカミチくん今北の森で侵入者がそこを担当しとる者達を倒したようなんじゃいますぐ向かってくれ」

「わかりました。ただしこんな楽しい戦いを妨害されたんです、その侵入者の相手は僕にやらせてもらいますよ」

「無論そのつもりじゃ」

「ではいきますね」

確かに強かったが噂ほどではなかったな。少々残念だ、やはり『ナンバーズ』内でも力の差はあるのか

高畑先生が何かつぶやいている。戦った感想でも聞いてみようか。

「どうしたんですか？高畑先生？」

はは、高畑先生がかすれたように笑う。

「どうしたもなにも彼は僕との戦いで手を抜いていたよ」

「？そうは見えませんでしたか？」

「いや、確かに全力だったろうね、ただ彼は気も魔力も“全く使っていないかった”」

「な！？ばかな彼は居合い拳をよけるために何度か瞬動を使っていたではないですか！？」

「いや、あれはただ普通によけていただけだよ……………」

「では豪殺居合い拳を気も使わず破ったと言っているのですか！？」

「ああ」

そんなことが可能なのか？これが『ナンバーズ』の実力とでも言う

のか!?

龍宮Side End

??side

ふはははははは!!我が名は『五芒星』の『火』カエシ火炎寺 スオウ蘇芳だ。

こんな警備のザルな所に侵入するだけで100万などなんとおいしい話なんだ

さっきの警備のやつらも我が式神が簡単にあしらったしな

ん?ははは、また獲物がきたは!

「我が名は『五芒星』の『火』火炎寺「黙れ」な、なんだと!?!」

「だ・か・ら黙れつつてんだよ三下」

「貴様！？『五芒星』であるこの私にいつているのか！？」

ふざけるな、こんな気も全くないような男に『五芒星』である私が馬鹿にされてたまるか！？

「当たり前だろ三下」

「ふざけるなああああああああ」

殺す！絶対に殺してやる！こんなところで出すとは思わなかったが我が最強の式神で骨まで焼き尽くしてやる！！

「我が名は火炎寺 蘇芳ここに我が名を刻むいでよ式神『炎王』」

その瞬間地面から何本も火柱が上がり這い上がるように炎の巨人が出てくる。

「骨まで燃え尽きろおおおおおおお」

槍を一閃そつただ一閃しただけで『炎王』は消える

「な、なんだと！？」

「ん？まさか今のがお前のとおきだったのか？はは、すまんすまん仮にも『五芒星』なんて偉そうに名乗るからまさか、こんなシケたもんだとは思わなかった」

は、ばかなありえん。あれは私が召喚出来る式神で最も強い式神なんだぞ！？なんなんだあの化け物は！？

「もういいや、死ね」

「ひっ！？た、たすけて」

私が最後に見たのは男が槍を振るところだった。

火炎寺Side End

「やってくれたのう、那由多くんこの者にいろいろ聞かねばならんことがあったというのに……………」

「すみません。つい、やりすぎました」

「次は殺さぬようにするんじゃないぞ、それと警備は基本的に2、3人1組でもらうぞい」

「わかりました」

「今日はもう帰ってもよいぞ明日も頼むぞ」

「わかりました。本日はどうもすみません」

「よいよい、ではの」

「はい、また明日」

「大変になるの……………」

静かな森に近右衛門のつぶやきが響く。

第2話（後書き）

とあるの一方通行のセリフを少し拝借させてもらいました。

誤字、脱字お知らせください。

感想もドンドン下さい。

第3話（前書き）

感想を書いて下さった方々への返信方法がわからないのであとがきに書かせてもらっています。

第3話

「これとそれとそつちにあるやつを下さい」

「2980円になります」

こんにちは、みなさん那由多です。ただいまお買いもの中です。

明日から教師になるということで色々買わないといけなくなってしまいました。

教師って以外と金のかかる職業なんですね。スーツとかもの凄く高かったし、というより……これ経費でおちるんでしょうか？

おちなかったら痛い出費なんですよね。

ん？あれは猫じゃないですか！僕動物大好きなんですよね！

「確かさつき買ったツナ缶が……あつたあつた」

ツナ缶って食べても大丈夫だよね？

「たーんとお食べ」

すると一斉に猫が来て食べだします。いやゝなごみますねゝ

「あの、すみません」

僕が猫の食事を見ているとロボットのような娘と西洋人形のような娘が立っていた。

するとロボットのような娘が話しかけてきた。っていうかロボットじゃん！

「なんですか？」

「猫に餌をあげるので少しずつしてくれませんか」

あゝ確かに邪魔だったな。

「これはすいません、どうぞ」

「おい！貴様『ナンバーズ』らしいな？」

「ん？なんで知ってるの？っていうか魔法生徒だったの？」

「昨日見ていたから貴様のことは知っている。あのタカミチを気も使わず倒すとはな」

「あゝ昨日遠くから見てたのは君たちだったんだね」

「というか実際は倒してないんだけど……………」。

「ッ！？何故わかった？完全に気配を消していたはずだぞ？」

確かに普通の人にはわかんないよね。

「だって僕がタカミチさんの豪殺居合い拳と相打ちになったとき一瞬動揺したでしょ？」

まあ実際あれがなかったら気づかなかったよ。

「ふはは、確かに一瞬動揺したが本当に一瞬だったぞ普通は気づかん」

「そりゃあ『ナンバーズ』だから普通じゃないよ」

「ふははは、気に入ったお前とは1度本気で戦ってみたいな」

あれほど気配を消すのがうまいんだから強さも確かだろうね。

「それじゃあ楽しませてくれるんだよね？お嬢さん」

「お嬢さんじゃない！！我が名はエヴァンジェリン、エヴァンジェリン A K マクダウェル誇り高き真祖の吸血鬼だ」

……ただ者じゃないと思っていたけど、あの闇の福音だったとは。

「それはすまなかったね、エヴァンジェリン」

「長いからエヴァでいい、それと私の眼を見る！今から幻想世界に連れて行く、そこなら私も呪いの影響を受けないから本気で戦える！」

呪い？真祖の吸血鬼なのに魔力がまったく感じられないのはその呪いのためなのか？

「……………わかったよ」

「では行くぞ!!」

「へーここが幻想世界なんだ」

そこは水が海のように広がっており、中心には島のような建造物がある。

「どうだ!すごいだろ!!」

なんか真祖の吸血鬼というより子供みたいだな。

「すごいね……………」

そう言いながらエヴァの頭をなでる。

「なでるな!!ふん、それよりも貴様の本気見せてもらっぞ」

この人クラスになると手を抜いたらすぐばれるからな。しょうがな
いか。

「…………別に本気を出すのはかまわない、ただこのことを絶対この学園の者に言わないと誓ってほしい」

「別にいいが、なぜ本気で戦ったことをそこまでして秘密にしたい？」

「見ればわかるよいくよ」

その瞬間那由多から膨大な魔力があふれ出す。

「こ、これは全盛期の私と変わらんぞ!？」

「まだだよ、これが僕の“本気”だよ」

「な!？そ、その姿は!？」

「さすがは真祖の吸血鬼この姿になった僕は『ナンバーズ』でも一番の防御力を誇っているんだけど、まさか傷をつけられるとは」

そう言う那由多には頬に傷があるだけでほぼ外傷はない。一方エヴァンジェリンはボロボロとは言わないまでも、ところどころに傷が

あり勝敗は見ただけでわかるものとなっていた。

「……………しかし貴様があの種族の生き残りだったとはな、そういえば貴様は刹那と兄妹ではなかったのか？」

「刹那とは義兄妹ですよ、それと絶対に言わないでくださいね」

「わかっている。それよりも私の呪いを解け、貴様の種族は回復や解呪に優れていると聞いたぞ」

「……………それは無理です。14年前の事件をしっていますか？」

「ああ、昔あのじじいと暮をうっているとき口にしたのを聞いたことがある」

「そうですね、なら話を続けますね回復や解呪が出来ない理由なんですけど僕を拾ってくれた人が言うには14年前の事件の際に僕の心に闇が出来て人を癒すという概念を受け入れられないんだそうです、だから僕は一族の力で他人を癒せないんです」

「……………そうか」

「すみません」

「いや、別にいいんだそれよりも余計に貴様を気に入ったよ」

闇の福音に気に入られる……………いいのか悪いのか判断に迷うな。

「そりゃ、ありがとう今後ともよろしく」

「ああ、それではそろそろ現実に戻ろうか」

そういえばここって幻想世界でしたね。忘れてました。

「では、またな那由多」

「ええ、さよならエヴァ」

そういえば、今日の夜も警備の仕事があったんだ。はあ面倒臭いサボりたいな。

エヴァと別れた後家で適当に時間をつぶして時間に間に合うように家を出て世界樹の前に来ると刹那と昨日『ナンバーズ』と聞いて反応した娘がいました。

「刹那じゃないか？どうしたの？」

「那由兄知らないの警備の仕事は基本的に2、3人1組でするんだよ」

……………そういえば昨日学園長が言っていた気がする。

「ということは、今日は刹那とえーと、すみません名前を教えてください」

「刹那のパートナーの龍宮 真名だ。よろしく那由多さん」

「こちらこそよろしく龍宮さん」

「こちら那由多異常なしです」

「……………何してるの、那由兄」

「昨日の人と同一人物とは考えられないな」

はい、那由多です。え？なんでこんなに、あきられているかって？ふざけたからに決まってるじゃないですか。あれから1時間何にも起きないんですけど、最初の方は戦闘になった時どのようにか戦うか

などを話したり、学園でのことなど色々話すことはあったけど良く
て30分くらいしかもたなくて、今じゃ正直暇です。少しくらいふ
ざけたくもなります。

「いや、暇だから少しでも気分をだそうかなと」

「もう！！ふざけないで那由兄！！いつ侵入者が来るかわかんない
んだよ！！」

「わかったよ、刹那」

これ以上は刹那が本当にキレそうだから止めないと。

「君たちは本当に面白いな、ん？どうやら侵入者が来たようだよ」

「そうみたいだね」

「なに2人ともものんびりしてるんですか！？急いで行かないと」

「はいはい、じゃあさっき決めた通り刹那と僕が前衛で戦って取り
こぼしやピンチの時は龍宮さん頼むよ」

「わかりました」

「ああ、まかせてくれ」

「鬼か……………」

こりゃあ犯人は関西のやつだな。にしてもこの量からすると術師は相当の腕だな。

まあ、関係ないんだけど

「じゃあすぐに終わらせようか、行くよ刹那」

「はい」

「ふう、終わったね」

「……………」

あれ？2人が黙ってる？なんで？

「いや那由兄（那由多さん）が強すぎるんだよ（です）」

「おお、まさか心を読まれるとは」

「大体、なんですかあれ！気も使ってないのになんで十体以上の鬼

を一撃で還すことができるんですか！！あなたはどこのバグですか
！！」

「な！？それは僕に失礼だよ刹那」

「そ、それは確かにバグは言いすぎました。すいません」

「そうだよ、僕の力はある倍はだせるよ」

僕があんなに弱いわけないだろ。

「そっちですか！！私の謝罪を返して下さい」

「漫才はそこまでしてくれ、それより今日はこの辺で終わろうか」

龍宮さんが笑いながら切り上げにかかる。

「そうだね、また明日」

第3話（後書き）

那由多の性格がわかんなくなってきた。……………どうしよう

感想を書いて下さった方々への返信

グラムサイト2さん感想ありがとうございました。
私もそう思います。というかやりすぎですかね？

月野さん感想ありがとうございました。

刹那・アキラはそのつもりです。ただ他の3人は今後の展開しだいなのでご期待にそえないかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323s/>

魔法先生ネギま！ 刹那の兄、その名は那由多！！

2011年4月11日08時00分発行